

# 長崎県島原市方言の一般語彙と助詞・助動詞の音調

崎村 弘文

## On the Tonal System of the Basic Words and Joshi 助詞・Jodoushi 助動詞 of Shimabara Dialect

Hirofumi SAKIMURA

【要旨】 (4. おわりに参照。)

【キーワード】 島原市方言、2型音調、助詞・助動詞

### 1. はじめに

長崎県島原市方言は、モーラを韻律単位とする2型音調方言と認められる。以下、一般語彙(体言・用言)と助詞・助動詞の音調について見て行くが、重点はそのうち後者の方に在ると云って良い。

調査に際し、話者として林田美佐子氏(1929年生)・中村美代子氏(1936年生)・奥村睦子氏(1940年生)の協力を得た。

### 2. 一般語彙の音調

#### 2-1 体言の音調

具体的様相は以下に示す通りであり、次のような調類にまとめられる。

	1モーラ語 2モーラ語	3モーラ語	4モーラ語	...
a類	●○～●●▷	●●○～●●○▷	●●○○～●●○○▷	...
b類	○●～○○▶	○○●～○○○▶	○○○●～○○○○▶	...

●○～●●▷

子・血・戸<sub>1</sub>・名・葉<sub>2</sub>・飴・蟻・牛・腕・甥<sup>カジエ</sup>・風・釘・口・首・歛・腰・底・袖・竹・爪・鳥・庭・蠅・箱・蜂・鼻・髻・膝・臍・星・右・水・道・虫・桃<sub>1</sub>・石・歌・音・紙・川・旅・夏・虹・旗・肘・冬・胸・村<sub>2</sub>・鮭(酒はサケ～サケガ。或いは、いわゆる家中弁・鉄砲町弁等の影響有りしか。)

○●～○○▶

木・手・目・湯<sub>3</sub>・齒<sub>1</sub>・酒<sub>1</sub>・垢・脚・網・池・犬・色・馬・親・神・瓶・草・櫛・靴・雲・米・塩・舌・島・月・綱<sup>ツラ</sup>・面・時・年・波・墓・花・腹・豆・耳・姪・物・山・指・夢・綿<sub>3</sub>・跡・息・板・糸・白・海・帯・数・肩・汁<sup>シユル</sup>・隅・側・種・杖・中・箸・針・舟・松<sub>4</sub>・秋<sup>アツキ</sup>・汗・雨・影・声・鶴・鍋・春・前・腿<sub>5</sub>・乳・咽・孫

●●○～●●○▷

形・鎖・煙・印・初め・息子<sup>形</sup>・小豆<sup>アズキ</sup>・女<sup>オナゴ</sup>・東・娘<sup>小豆</sup>・力・二十歳<sup>二十歳</sup>・昨日<sup>キノウ</sup>・大人<sup>オトナ</sup>

○○●～○○○▷

踊り・相撲<sup>スモ</sup>・涎<sup>ヨダ</sup>・六<sup>ム</sup>一つ<sup>小豆</sup>・明日・頭・男・鏡・鉈<sup>カナ</sup>・言葉・白髪<sup>シラガ</sup>・助け・頼み・俵・流れ<sup>ハサミ</sup>・鉢<sup>ハチ</sup>・光<sup>ミツ</sup>・油・いところ・命・涙・柱<sup>ホーキ</sup>・帚<sup>ホウキ</sup>・枕<sup>シマ</sup>・蛙<sup>カエル</sup>・雀<sup>シメナカ</sup>・鼠<sup>ネズミ</sup>・裸・裸足・左・蚯蚓<sup>ミミズ</sup>・後ろ・辛子・鯨・葉・卵・椿・畑・緑<sup>カキ</sup>・踵<sup>ヒタ</sup>・子指・額・眉毛・嫁御

●●○○～●●○○▷

兄(ニーチャン・アンヤン(古))・姉(ネーチャン・アネヤン(古))・おじ(オジサン)・おば(オバサン)・祖父(ジサン)・祖母(バーサン)・父(トーチャン)・母(カーチャン)

○○○●～○○○○▷

妹(イモト)・弟(オトト)・親指・髪の毛・手のひら・中指・聲<sup>ムコサン</sup>さん

○○○○●～○○○○○▷

薬指

○○○○○●～○○○○○○▷

人差し指

※鳥原市方言のいわゆる1モーラ名詞相当語は、母音を十分に引いて2モーラ分の長さで発音される。その調値の在り方は、いわゆる2モーラ名詞相当語のそれと変わりがない。したがって、上記では両者を同様に扱った。

調類～調値の関係規定は、

a類：語句の第1・第2モーラを高にせよ。語が2モーラの場合は、第1モーラを高にせよ。

b類：語句の末尾モーラを高にせよ。

で良い。

## 2-2 用言の音調

動詞・形容詞の終止連体形の具体的様相を以下に示す。

・動詞

●○：云う・行く・売る・追う・置く・押す・買う・聞く・消す・飛ぶ・織る<sub>1</sub>

○●：有る・打つ・書く・食う・切る・組む・繰る・取る・持つ・読む<sub>2</sub>

●●○：当る・浮ぶ・歌う・変る・進む・曲がる<sub>1</sub>

○○●：余る・動く・落す・作る・習う・走る<sub>2</sub>

●●○○：生まれる・教える<sup>カス</sup>・重ねる・聞える・並べる・忘れる<sub>1</sub>

○○○●：集める<sup>カス</sup>・数える<sup>カス</sup>・流れる・離れる・任せる・別れる<sub>2</sub>

※鳥原市方言では、いわゆる二段活用動詞の後裔がきれいに一段活用化している。九州方言としては珍しい部類に属すると思われるが、或いはこれにも家中弁・鉄砲町弁等の影響があったか。

・形容詞

●●○：浅か・厚か・重か・軽か・暗か・遠か・欲しか<sub>1</sub>

○○●：多か・黒か・寒か・近か<sup>ナン</sup>・長か<sub>2</sub>

- ：重たか・悲しか・優しか・卑しか<sub>1</sub>  
 ○○○●<sup>アツク</sup>：暑か・怪しか・厳しか・苦しか・親しか・涼しか・楽しか・嬉しか・悔しか・寂しか<sub>2</sub>

動詞・形容詞とも、名詞について認められる調値以外のそれが認められることは無い。終止連体形に関する限り、動詞・形容詞の調類～調値の関係規定は名詞のそれと同一と見て良いものと思われる。

### 3. 助詞・助動詞の音調

3-1 以下では、木部暢子2000に取り上げられた長崎県南高来郡加津佐町方言の例と対照するかたちで、島原市方言の助詞・助動詞の音調の具体的様相を見て行くこととしたい。平山輝男1951等の先行研究に依ると同様、木部の調査でも加津佐町方言は2型音調と認められるようであるが、うちb類については〈ゆるくなめらかに上昇し、鹿児島方言のように1音節卓立式ではない〉として〈上昇の位置を記入せず〉あたかも低平であるかのような〈表記〉を取るとしている。これは、先行研究との大きな違いであり、筆者の島原市方言についての調査結果とも異なるものである。肥筑部諸方言の中には、実際b類を低平で発音するものが有ることに照らして、この処置が妥当性を欠くものではないか——それらの諸方言からは把えにくい韻律特性（韻律単位はモーラかシラビームか等云々）を明らかにする機会を逸するものではないか——との危惧を覚えるものである。（なお、以下の挙例では調値の高部を示すのに、木部の用いたカッコ式を改め傍線式に依った。）

#### 3-2 いわゆる従属式の助詞・助動詞の音調

(1) A (泣く)	{ 以下、上段 が加津佐町 の、下段が 島原市の調 査結果。	ナカスル	ナカルル	ナカス	
		ナカシエル	ナカレル	ナカス	
	ナカン	ナキワエン	ニヤータ	ニヤーテ	
	ナカン	ナキャエン	ナイタ	ナイテ	
	ニヤーチ	ニヤータル			
	—	ナイタリ			
(ママ、以下同) B (読む)	{	ヨマスル	ヨマルル	ヨマス	ヨマン
		ヨマシエル	ヨマレル	ヨマス	ヨマン
	ヨミワエン	ヨーダ	ヨーデ	ヨージ	
	ヨミヤエン	ヨンダ	ヨンデ	—	
	ヨーダル				
	ヨンダリ				

(2) A (歌)  $\left\{ \begin{array}{l} \overline{\text{ウタン}} \quad \overline{\text{ウタバ}} \quad \overline{\text{ウタワ}} \quad \overline{\text{ウタモ}} \quad \overline{\text{ウタニ}} \\ \overline{\text{ウタン}} \quad \overline{\text{ウタバ}} \quad \overline{\text{ウタワ}} \quad \overline{\text{ウタモ}} \quad \overline{\text{ウタニ}} \end{array} \right.$

$\left\{ \begin{array}{l} \overline{\text{ウタト}} \quad \overline{\text{ウタカラ}} \quad \overline{\text{ウタデン}} \quad \overline{\text{ウタドン}} \\ \overline{\text{ウタト}} \quad \overline{\text{ウタカラ}} \quad \overline{\text{ウタデン}} \quad \overline{\text{ウタドン}} \end{array} \right.$

$\left\{ \begin{array}{l} \overline{\text{ウタナツト}} \quad \overline{\text{ウタサキヤ}} \\ \overline{\text{ウタナツト}} \quad \overline{\text{ウタサエ}} \end{array} \right.$

B (雨)  $\left\{ \begin{array}{l} \overline{\text{アメン}} \quad \overline{\text{アメバ}} \quad \overline{\text{アメワ}} \quad \overline{\text{アメモ}} \quad \overline{\text{アメニ}} \\ \overline{\text{アメン}} \quad \overline{\text{アメバ}} \quad \overline{\text{アメワ}} \quad \overline{\text{アメモ}} \quad \overline{\text{アメニ}} \end{array} \right.$

$\left\{ \begin{array}{l} \overline{\text{アメト}} \quad \overline{\text{アメカラ}} \quad \overline{\text{アメデン}} \quad \overline{\text{アメドン}} \\ \overline{\text{アメト}} \quad \overline{\text{アメカラ}} \quad \overline{\text{アメデン}} \quad \overline{\text{アメドン}} \end{array} \right.$

$\left\{ \begin{array}{l} \overline{\text{アメナツト}} \quad \overline{\text{アメサキヤ}} \\ \overline{\text{アメナツト}} \quad \overline{\text{アメサエ}} \end{array} \right.$

(3) A (泣く)  $\left\{ \begin{array}{l} \overline{\text{ナカセタ}} \quad \overline{\text{ナカレタ}} \quad \overline{\text{ナカシタ}} \quad \overline{\text{ナカッサン}} \\ \overline{\text{ナカシエタ}} \quad \overline{\text{ナカレタ}} \quad \overline{\text{ナカシタ}} \quad \overline{\text{ナカッサン}} \end{array} \right.$

B (読む)  $\left\{ \begin{array}{l} \overline{\text{ヨマセタ}} \quad \overline{\text{ヨマレタ}} \quad \overline{\text{ヨマシタ}} \quad \overline{\text{ヨマッサン}} \\ \overline{\text{ヨマシエタ}} \quad \overline{\text{ヨマレタ}} \quad \overline{\text{ヨマシタ}} \quad \overline{\text{ヨマッサン}} \end{array} \right.$

(4) A (歌)  $\left\{ \begin{array}{l} \overline{\text{ウタニヤー}} \quad \overline{\text{ウタニデン}} \quad \overline{\text{ウタニマジヤー}} \\ \overline{\text{ウタニヤー}} \quad \overline{\text{ウタニデン}} \quad \overline{\text{ウタニマジヤー}} \end{array} \right.$

B (雨)  $\left\{ \begin{array}{l} \overline{\text{アメニヤー}} \quad \overline{\text{アメニデン}} \quad \overline{\text{アメニマジヤー}} \\ \overline{\text{アメニヤ}} \quad \overline{\text{アメニデン}} \quad \overline{\text{アメニマジヤ}} \end{array} \right.$

### 3-3 いわゆる独立式の助詞・助動詞の音調

(5) A (泣く)  $\left\{ \begin{array}{l} \overline{\text{ナクジャロ}} \quad \overline{\text{ナカスジャロ}} \quad \overline{\text{ナカンジャッタ}} \\ \overline{\text{ナクジャロ}} \quad \overline{\text{ナカスジャロ}} \quad \overline{\text{ナカンジャッタ}} \end{array} \right.$

ナカレンジャッタ	ナツギリヤ	ナコカイ
ナカレンジャッタ	ナツギリヤ	ナコカイ

ヨムジャロ	ヨマスジャロ	ヨマンジャッタ
ヨムジャロ	ヨマスジャロ	ヨマンジャッタ

ヨマレンジャッタ	ヨムギリヤ
ヨマレンジャッタ	ヨムギリヤ

ヨモカイ
ヨモカイ

カージャロ	カージャッタ	カーカイ
カージャロ	カージャッタ	カーカニヤ

テージャロ	テージャッタ	テーカイ
テージャロ	テージャッタ	テーカニヤ

ウタジャロ	ウタジャッタ	ウタカイ
ウタジャロ	ウタジャッタ	ウタカニヤ

アメジャロ	アメジャッタ	アメカイ
アメジャロ	アメジャッタ	アメカニヤ

ナクテ	ナクバイ	ナクタイ	ナクゲナ
ナクテ	ナクバイ	ナクタイ	ナクゲナ

ナクバツテン	ナクケン	ナキマス
ナクバツテン	ナクケン	ナキマス

ナクシ	ナクシキヤ	ナツカナイ
ナクシ	ナクシキヤ	ナクカニヤ

B (読む) { ヨムテ ヨムバイ ヨムタイ ヨムゲナ  
 ヨムテ ヨムバイ ヨムタイ ヨムゲナ

{ ヨムバツテン ヨムケン ヨミマス  
 ヨムバツテン ヨムケン ヨミマス。

{ ヨムシ ヨムシキヤ ヨムカナ  
 ヨムシ ヨムシキヤ ヨムカニヤ

(9) A (蚊) { カーバイ カートアイ カーゲナ カーバツテン  
 カーバイ カートアイ カーゲナ カーバツテン

{ カーシキヤ カーカナイ カータナイ  
 カーシキヤ カーカニヤ カータナイ

B (手) { テーバイ テータイ テーゲナ テーバツテン  
 テーバイ テータイ テーゲナ テーバツテン

{ テーシキヤ テーカナイ テータナイ  
 テーシキヤ テーカニヤ テータナイ

(10) A (歌) { ウタバイ ウタタイ ウタゲナ ウタバツテン  
 ウタバイ ウタタイ ウタゲナ ウタバツテン

{ ウタシキヤ ウタカナイ ウタタナイ  
 ウタシキヤ ウタカニヤ ウタタナイ

B (雨) { アメバイ アメタイ アメゲナ アメバツテン  
 アメバイ アメタイ アメゲナ アメバツテン

アメシキヤ	アメカナイ	アメタナイ
アメシキヤ	アメカニャー	アメタナイ

木部は、(5)(6)(7)を独立式A型の助詞・助動詞、(8)(9)(10)を独立式B型の助詞・助動詞の例としているが、島原市方言について見る限りかなり異なる結果となっている。即ち、(5)(8)はほぼ従属式((5)のカイの例のみ独立式χ型)、(6)(7)(9)(10)は独立式であろうが、いずれもχ型(A型にもB型にも低平で後接する)のそれと見られる。木部がB型と見た助詞・助動詞も、調値が低平で末尾高と成らない。加津佐町方言でも同様であったものを、木部の〈表記〉様式では、実際に末尾が高であってもなくても表記に変わりが無いことで、それをB型と措定したものではないか。であれば、その見方は到底受け入れられない。

筆者は、木部の調査結果に疑問の念を禁じ得ないのであるが、百歩譲ってそれが実際そのようであったものとして、筆者の調査結果との間に何らかの関係——例えば、一方からもう一方への音調変化の関係が認められないかとも考えてみたが、下記の実事から見てどうもそのようには行かないようである。

- i. (5)のb類語に後接の例では、加津佐町方言の語句の高みが島原市方言のそれより1シラビーム分前に有る(前者は、語句の末尾から2番目のシラビームに高み。後者は、句末シラビームに高み)。
- ii. (6)(7)のb類語に後接の例では、加津佐町方言の語句の高みが島原市方言のそれより1シラビーム分後に有る(前者は、語句の末尾から2番目のシラビームに高み。後者は、語末シラビームに高み)。
- iii. (8)のb類語に後接の例では、加津佐町方言の語句の高みが島原市方言のそれより1～2シラビーム分前に有る(前者は、語末シラビームに高み。後者は、句末シラビームに高み)。

同じくb類語に後接する例ながら、或るいは前、或るいは後(それも1シラビーム分とは限らない)と高みがずれていて、これを通常の音調変化の法則によって説明できるものとは考え難い。考え得る余地としては、よほど特殊な変化の在り方が有ると考えるか、いっそ音調変化の関係は無いと見るか、いずれかであろう。筆者が取りたいのは、後者の考え方である。

なお、上記iに関連して云えば、b類動詞に後接するジャ系の助動詞等が句全体でb類の調値を取ることを、即ち、b類名詞に後接する場合と異なり従属式となることは、薩隅大部方言でも見られるところであり、何ら珍しいことではない。iiiについても、或いはそれに準じて考えて良いものかと思われる。

## 3-4 ヨル・トル (チヨル) の音調

(14) A (着る)  $\left\{ \begin{array}{llll} \overline{\text{キヨル}} & \overline{\text{キヨラン}} & \overline{\text{キヨッタ}} & \overline{\text{キヨラス}} \\ \overline{\text{キヨル}} & \overline{\text{キヨラン}} & \overline{\text{キヨッタ}} & \overline{\text{キヨラス}} \end{array} \right.$

$\left\{ \begin{array}{l} \overline{\text{キヨラッサン}} \\ \overline{\text{キヨラッサン}} \end{array} \right.$

B (見る)  $\left\{ \begin{array}{llll} \overline{\text{ミヨル}} & \overline{\text{ミヨラン}} & \overline{\text{ミヨッタ}} & \overline{\text{ミヨラス}} \\ \overline{\text{ミヨル}} & \overline{\text{ミヨラン}} & \overline{\text{ミヨッタ}} & \overline{\text{ミヨラス}} \end{array} \right.$

$\left\{ \begin{array}{l} \overline{\text{ミヨラッサン}} \\ \overline{\text{ミヨラッサン}} \end{array} \right.$

(15) A (鳴る)  $\left\{ \begin{array}{lll} \overline{\text{ナイヨル}} & \overline{\text{ナイヨラン}} & \overline{\text{ナイヨッタ}} \\ \overline{\text{ナイヨル}} & \overline{\text{ナイヨラン}} & \overline{\text{ナイヨッタ}} \end{array} \right.$

$\left\{ \begin{array}{ll} \overline{\text{ナイヨラス}} & \overline{\text{ナイヨラッサン}} \\ \overline{\text{ナイヨラス}} & \overline{\text{ナイヨラッサン}} \end{array} \right.$

B (成る)  $\left\{ \begin{array}{lll} \overline{\text{ナイヨル}} \sim \overline{\text{ナイヨル}} & \overline{\text{ナイヨラン}} & \overline{\text{ナイヨッタ}} \\ \overline{\text{ナイヨル}} & \overline{\text{ナイヨラン}} & \overline{\text{ナイヨッタ}} \end{array} \right.$

$\left\{ \begin{array}{ll} \overline{\text{ナイヨラス}} & \overline{\text{ナイヨラッサン}} \\ \overline{\text{ナイヨラス}} & \overline{\text{ナイヨラッサン}} \end{array} \right.$

(16) A (開ける)  $\left\{ \begin{array}{lll} \overline{\text{アケヨル}} & \overline{\text{アケヨラン}} & \overline{\text{アケヨッタ}} \\ \overline{\text{アケヨル}} & \overline{\text{アケヨラン}} & \overline{\text{アケヨッタ}} \end{array} \right.$

$\left\{ \begin{array}{ll} \overline{\text{アケヨラス}} & \overline{\text{アケヨラッサン}} \\ \overline{\text{アケヨラス}} & \overline{\text{アケヨラッサン}} \end{array} \right.$

B (起きる) { オキヨル<sub>・</sub>      オキヨラン      オキヨッタ  
                          { オキヨル      オキヨラン      オキヨッタ  
                          { オキヨラス。      オキヨラッサン  
                          { オキヨラス。      オキヨラッサン

(17) A (着る) { キトル<sub>・</sub>      キトラン      キトッタ      キトラス。  
                          { キチョル<sub>・</sub>      キチョラン      キチョッタ      キチョラス。  
                          { キトラッサン  
                          { キチョラッサン

B (見る) { ミトル      ミトラン      ミトッタ      ミトラス。  
                          { ミチョル      ミチョラン      ミチョッタ      ミチョラス  
                          { ミトラッサン  
                          { ミチョラッサン

(18) A (鳴る) { ナットル<sub>・</sub>      ナットラン      ナットッタ  
                          { ナッチョル      ナッチョラン      ナッチョッタ  
                          { ナットラス。      ナットラッサン  
                          { ナッチョラス。      ナッチョラッサン

B (成る) { ナットル<sub>・</sub>~ナットル<sub>・</sub>      ナットラン      ナットッタ  
                          { ナッチョル      ナッチョラン      ナッチョッタ  
                          { ナットラス。      ナットラッサン  
                          { ナッチョラス。      ナッチョラッサン

(19) A (開ける)	アケトル	アケトラン	アケトッタ
	アケチョル	アケチョラン	アケチョッタ
	アケトラス	アケトラッサン	
	アケチョラス	アケチョラッサン	

B (起きる)	オキトル	オキトラン	オキトッタ
	オキチョル	オキチョラン	オキチョッタ
	オキトラス	オキトラッサン	
	オキチョラス	オキチョラッサン	

島原市方言のヨル・チョルの音調は、見ての如く甚だ簡明である。即ち、全体の a 類・b 類の調値の対立が中和して 1 型化しており、その調値は基本的に a 類のそれに等しい、と見て良い。所々、キョラッサンの如く第 3 モーラまで高となる句や、ナイヨラス・ナイヨラッサンの如く 2 ヶ所に高みが現われる句が認められるが、それらはヨル・チョルの語源居ルの変化形調値オラス・オラッサン等がなお生きて作用しているためと思われる。

これに対し、加津佐町方言の場合は、a 類語に後接のヨル・トル調値については島原市方言と大体において同じようであるが、b 類語に後接のそれが大きく異なっている。概略、 $\sim$ ヨル $\sim$ ・ $\sim$ ヨラ $\sim$  ( $\sim$ ヨラス例外)・ $\sim$ ヨツ $\sim$ ならびに $\sim$ トル $\sim$ ・ $\sim$ トラ $\sim$  ( $\sim$ トラス例外)・ $\sim$ トツ $\sim$ の部分が高いと観察しているようで、ヨル・トルを、基本的に、b 類語に後接した場合に調値の〈顕在化〉する独立式 A 型の助動詞と見ているようである。ただし例外が見られることについて、木部は、ヨル・トルの文法的性格——〈独立した 1 語を形成せず、自立語（活用形）の一部をなすものでしかないが、アクセント的には独立のアクセント素を有する〉——に影響されて〈変則的なアクセントが表れることがあるのかもしれない〉とする。木部の調値観察が正確であるか否かがまず問われねばなるまいが、その中には、ナツトルといった聊か発音の安定性を欠くのではないかと思われる調値も見えており、不審な点が少なくない。島原市方言との関係は、ここでもたどり難いようである。

### 3-5 いわゆる特殊式の助動詞の音調

助動詞ゴタッ（ゴタル）について見る。

(20) A (泣く)	ナツゴタッ	ナコゴタッ	ナツゴタッタ
	ナクゴタル	ナコゴタル	ナクゴタッタ

B (読む)	{	ヨ <sup>ー</sup> ンゴ <sup>ー</sup> タ <sup>ツ</sup>	ヨ <sup>ー</sup> モゴ <sup>ー</sup> タ <sup>ツ</sup>	ヨ <sup>ー</sup> ンゴ <sup>ー</sup> タ <sup>ツ</sup> ッ
		ヨ <sup>ー</sup> ムゴ <sup>ー</sup> タル	ヨ <sup>ー</sup> モゴ <sup>ー</sup> タル	ヨ <sup>ー</sup> ムゴ <sup>ー</sup> タ <sup>ツ</sup> ッ
(21) A (蚊)				
	{	カ <sup>ー</sup> ンゴ <sup>ー</sup> タ <sup>ツ</sup>	カ <sup>ー</sup> ンゴ <sup>ー</sup> タ <sup>ツ</sup> ッ	
		カ <sup>ー</sup> ンゴ <sup>ー</sup> タル	カ <sup>ー</sup> ンゴ <sup>ー</sup> タ <sup>ツ</sup> ッ	
B (手)				
	{	テ <sup>ー</sup> ンゴ <sup>ー</sup> タ <sup>ツ</sup>	テ <sup>ー</sup> ンゴ <sup>ー</sup> タ <sup>ツ</sup> ッ	
		テ <sup>ー</sup> ンゴ <sup>ー</sup> タル	テ <sup>ー</sup> ンゴ <sup>ー</sup> タ <sup>ツ</sup> ッ	
(22) A (歌)				
	{	ウ <sup>ー</sup> タンゴ <sup>ー</sup> タ <sup>ツ</sup>	ウ <sup>ー</sup> タンゴ <sup>ー</sup> タ <sup>ツ</sup> ッ	
		ウ <sup>ー</sup> タンゴ <sup>ー</sup> タル	ウ <sup>ー</sup> タンゴ <sup>ー</sup> タ <sup>ツ</sup> ッ	
B (雨)				
	{	ア <sup>ー</sup> メンゴ <sup>ー</sup> タ <sup>ツ</sup>	ア <sup>ー</sup> メンゴ <sup>ー</sup> タ <sup>ツ</sup> ッ	
		ア <sup>ー</sup> メンゴ <sup>ー</sup> タル	ア <sup>ー</sup> メンゴ <sup>ー</sup> タ <sup>ツ</sup> ッ	

加津佐町方言の例について、木部は、〈ゴタツはA型語に接続すると、全体として最初から2拍目までが高い音調になり、B型語に接続すると、ゴタツのゴが高くなるという特徴を持つ。そして、これに過去のタ（従属式）が接続しても、音調の山は移動しない。〉と述べている。確かに、加津佐町方言の様相が上記の通りであるとすれば、それは正しい記述である。しかし、近隣に在ってそれに影響を与え得る力を持つ方言・島原市方言の例を参照すると、その記述をそのまま認めて良いものかどうか躊躇せざるを得ない。島原市方言では、a類語に後接する場合第1・第2モーラ高、さらにタが後接すればそのモーラも高、b類語に後接する場合第2モーラ高、さらにタが後接すればそのモーラも高、との規定が成り立つ。要するに、島原市方言のゴタルは、いわゆる独立式B型相当の助動詞なのである。或いは、加津佐町方言でもそうしたことが認められはしまいか、いずれは、きちんと検証してみる必要が有ろう。

#### 4. おわりに

4-1 以上、長崎県島原市方言の一般語彙（体言・用言）と助詞・助動詞の音調について見て来た。そこで明らかとなったのは、同方言が、基本的に、モーラを韻律単位とする2型音調の方言であり、一般語彙に関してはそれが明確に認められること、一方、助詞・助動詞に関しては、χ型の存在やヨル・ Chol調値の1型化等により、必ずしも明確にa類・b類の区別が認められないこと、などであった。そして、助詞・助動詞の音調に関しては、もう一つ、比較対照のために掲げた、木部の加津佐町方言についての調査結果に、かなり疑問を感じさせる点の有ることも明らかとなった。それについては、再検討の必要が有ること、繰り返すまでも無いであろう。

**参考文献**

- 木部暢子 2000 『西南部九州二型アクセントの研究』（勉誠出版）  
平山輝男 1951 『九州方言音調の研究』（學界之指針社）

※なお、本稿に示した内容については、2005年1月8日の九州方言研究会第19回研究発表会において発表した。